

第1章 戦場

従軍生活

「負ける」と言うとは非国民

堀 万里子さんのお話から

太平洋戦争に突入したときは、家でラジオを聞いていました。米国と戦争状態になったと放送していて、「いよいよ戦争が始まったのだね」と、両親が話していました。「井の中の蛙大海を知らず」という言葉がありますよね。母が「あんな大きな国と戦争して勝つわけないのに。」と言うと、父が「昔、大きなロシアと戦争して勝ったから、アメリカにも勝つだろうと思っているんじゃないか。」と言っていました。

私は学校を出て、胸の病で静養していました。そのうち治ったのですが、黙っていたら被服廠、つまり軍隊の洋服をつくるころなどに徴用になると言われました。ちょうどそのころ、航空隊の試験があり、そろばんができればいいということでしたので、試験を受けました。試験の問題は、大きな数字の難しい計算で、私は十問ぐらいあったうち、たった一問しかできませんでした。それでも合格となり、「今日からすぐここへ入って仕事をしてくれ。」と言われたのです。

家に帰って採用されたことを報告したいと言うと、報告したらすぐに事務所に戻ってくるよと言われてました。急いで事務所に戻ると、召集された兵隊の給料の票がたくさん積んでありました。給料の半分は勤め先の職場で請求命令を出し、残りの半分は軍隊に日本銀行から給料を出すので、全ての給料票について、給料の半額を計算するよう命じられました。この計算をするために、急に忙しくなったらしいのです。

昭和十八（一九四三）年に燃料部に配置がえになりました。そのころの丘珠の飛行場は、フーリングと呼ばれる、飛行機の幅ぐらいいの大きさの組み立て式の板が、じゃぶじゃぶの水が溜

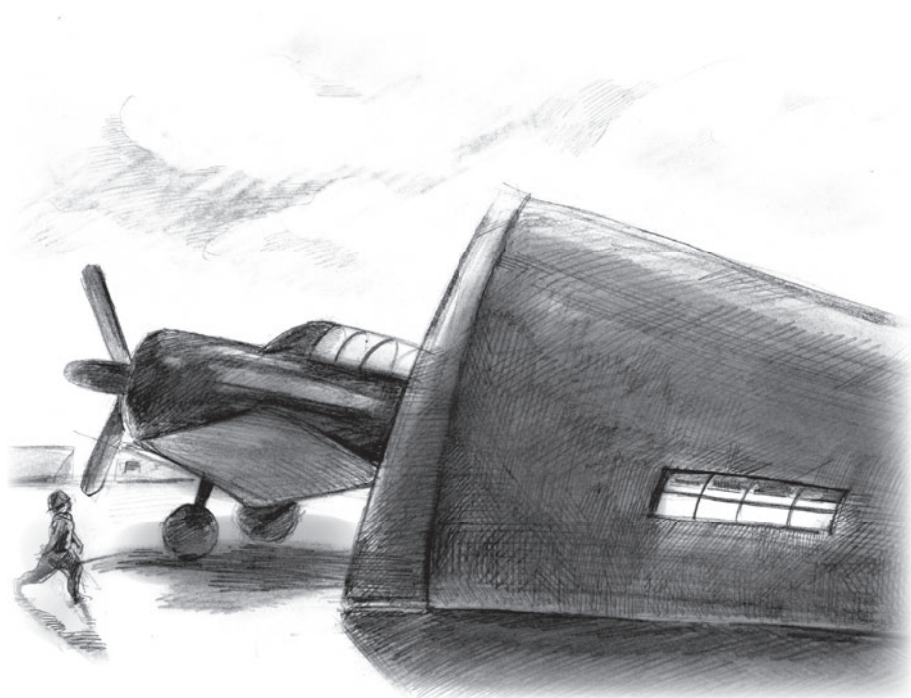
○徴用 国民を強制的に動員し、一定の業務に従事させること。

○軍属 軍人でなくて軍に所属する文官・文官待遇者など。
 ○召集令状 人を軍に呼び集める命令書。あわい赤色の紙を用いたので「赤紙」という。
 ○甲種、乙種、丙種 徴兵検査の結果で、甲種が第1級、乙種は甲種に次ぐ合格。丙種は国民兵役に適するが現役に適さないとされた。

まった水田みたいな上に敷いてあるだけなのです。そこに旧制中学の生徒がホースでびゅーっと種をまいて芝生にするのです。そして飛行機を入れるために土でつくったかまくらのようなものも芝生にすると、上から見たらずっと平らな芝生に見えるのです。そこには、立派な飛行機が二台並んでいました。ところが、そばに行ってみたら木製の飛行機で、それに金を塗って、真っ赤な日の丸を描いて、上から見ると本当の飛行機みたいなのでした。

滝川あたりにトウキビから油をとる工場がありました。私たちが燃料部に入ったときに、兵隊たちが田舎のトウキビを全部集めました。トウキビ山盛りのトウキビです。軍のお金で買うのですが、農家からみんな買うので民間の人は食べられません。トウキビを買い尽くして燃料工場に納めたら仕事は終わります。そのたびに軍属たちはあちこち転任させられました。

私は、最後は札幌連隊区司令部、今の中税務署（大通西十丁目）のところに転任になりました。前から経理をしていたので、ここでも経理でした。連隊区司令部は、召集令状を出すところでした。本立てのようなところにずらっとカードが並んでいて、それは召集の名簿なのです。ここまでは甲種、ここまでは乙種、ここからは丙種



戦争中の丘珠の飛行場

イメージ図

と並んでいるのです。もうそのときには甲種も乙種も全部カードがなくなっていて、残っているのは丙種だけでした。最終的には丙種の赤紙をみんなで残業して書きました。いよいよ兵隊がいなくなつて丙種を召集するのだから、これは大変だなと私たちは思っていました。

昭和二十(一九四五)年の八月に入ると、職場でアンケートのようなものがあり、無記名で思ったことを自由に書いて軍属に出せと言われました。「戦争に勝つか負けるか」という質問があつて、その下に「理由」と書いてあります。「負けるよね、この戦争。」などとよく言っていましたので、私は負けるところにマルをし、理由には、武器も何もなくて、兵隊が訓練に來ても竹槍一本しか渡されないと書きました。私たちも一緒に稽古させられました。敵が落下傘で飛行機から降りてくるのを下から竹槍で突くという稽古なので、それを毎日です。でも米軍が機関銃でババババッと撃つから、私たちはみんな死んでから降りてくると思つていました。そのような調子でしたので、戦争に負けると書いたのです。すると、もう一人、戦争に負けると書いた男性の軍属と二人して警察に呼ばれて、「おまえら非国民だ、家で控えている。」と言われまし

○落下傘 パラシュー
ト。傘のような形状で、
空気の力を受けて速度を
制御するもの。

○非国民 当時の日本で



ラジオを聴く人々

イメージ図

は、戦争に協力しない者や戦争に反対していると見なされた者を、国民としての義務を守らない者、国家を裏切るような行為をする者として、非国民と呼び非難した。

○将校 位が少尉以上の軍人。軍隊において、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の士官。

た。無記名なのですけどね。経理でいろいろ書類を書いているから私の字だと分かっています。それで、「何で非国民なのですか。」と聞いたら、「戦争に負けると言ったんです。」と答えます。「負けると思ったから、思ったとおりに書けと言われて、そのとおりに書きました。」と答えると、「そんなことを正直に書くばかがいるか。」とね。そのような調子なので、そろそろ危ないな、負けるのではないかと思っていたら、本当にその十五日後に戦争に負けたのです。

戦争が終わってから、兵隊も将校も、戦争に負けると思っていたが、口に出して言えなかったと言っていました。「おれたちは職業柄、負けるなんて言えなかったのだ」と。

八月十五日は、天皇陛下の声を生で聞いたことがないから聞こうと、みんなが集まって聞きに行ったのです。ジジジジと雑音が入るいいラジオではありませんでした。将校たちも集まってきて、そのラジオを聞いていて負けたということが分かったのです。戦争に負けたことがわかれると、職業軍人の人たちはみんなウワーツと泣いていました。戦争に負けた悔しさと、「職」を失い、明日からどうやって食べていくか分からず不安な気持ちが入り交じって泣いている。召集令状で徴集された人たちは、これでうちに帰れると喜んでいました。

戦争というのは殺し合いです。勝ち負けは関係なしに、二度とするものではないです。戦争することを決めた人たちは、負けるかもしれないと思ってからも、軍人のプライドで国民を戦争に駆り立てたのではないかと思えます。そういう戦争は絶対二度としてはいけません。

DATA

平成23年度中央区平和事業
聞き取り

- ・平成23年8月24日
- ・中央区役所



堀 万里子(ほり・まりこ)さん

- ・大正11(1922)年生まれ
- ・札幌市中央区在住

「負ける」と言うと非国民